

令和7年度2学期終業式 校長式辞

今日はクリスマスイブですので、先日クリスマスに関する新聞記事を読んだときに考えたことを皆さんと共有したいと思います。その記事は次の通りです。

「キリスト生誕の地とされるヨルダン川西岸のベツレヘムで6日夜、聖誕教会前のクリスマスツリーが3年ぶりにライトアップされた。過去2年はパレスチナ自治区ガザで続いた戦闘の影響で中止されていたが、今年は集まったキリスト教徒らが光り輝くツリーを見上げながら平和への祈りをささげた。」

というものでした。しかしこの数日後の13日、イスラエル軍がパレスチナ自治区ガザ地区北部で、イスラム組織ハマス幹部を狙い空爆をしたというニュースが流れました。イスラエルのネタニヤフ首相は、今回の空爆はイスラエル軍兵士が起爆装置で負傷させられたことに対する報復だと攻撃を正当化したということですが、10月の停戦合意後も連日のように衝突が続いており、停戦が形骸化していることが懸念されています。

このような暴力の応酬という泥沼にはまっているのはイスラエルとパレスチナだけでなく、ロシアとウクライナも同じことです。解決策が見いだせず袋小路に迷い込んだ状況で、人間に何ができるのかを考えなければならない。ここで私はクリスマスが持つ不思議な力に頼ってみたいくなるのです。

皆さんは「クリスマス休戦」の話を聞いたことがありますか。1914年7月に始まった第1次世界大戦の戦場で敵対していたドイツ軍とイギリス軍の兵士たちが、クリスマスの休日の前後に数日間だけ休戦したという出来事です。数ヶ月にわたる戦闘を経て、戦いに疲れていた兵士たちは、双方の合意のもとで武器を置き、「中間地帯」を越えて、敵の兵士たちとプレゼントとして物資を交換したり、サッカーの親善試合をしたりしたそうです。

この休戦はクリスマスの間終日保たれ、一部では新年まで続いたところもあったようです。灯りの吊り下げられた小さなクリスマスツリーの列が塹壕を縁取り、放置されていた遺体は共同で埋葬されました。

111年前のこの「クリスマス休戦」は、戦争と社会不安の絶えない現代においても希望の光を放ち、人類の持つ可能性を思い起こさせてくれます。人間には「聖なる瞬間」に、互いの違いを受け入れ、武器を置き、手を携えられる力がある。その「瞬間」を「永遠」のものにすることができないか。

できると私は思います。私には東京の豊洲市場、国内外から高級な海産物が集まる市場で働いている知り合いがいるのですが、彼から外国に魚の買い付けに行ったときの話を聞いたことがあります。昼間の商談ではなかなか折り合いがつかず、双方緊張した表情のまま話がまとまらなかったそうです。しかし、その夜の懇親会で状況は一変します。一緒に食事をし、お酒も入って気分もよくなり、お互いの家族写真などを見せ合いながら、「お前にもこんなにかわいい奥さんと子どもさんがいるんだな。お互い家族のために頑張ろうな」みたいな会話になってくると、途端に心の距離が縮まり、翌日の商談ではお互い妥協するところは妥協して一気に話がまとまったそうです。

やはり人間は、公式のフォーマルな場において論理だけで意見を戦わせているだけではだめで、インフォーマルなプライベートな空間で、自分だけでなく相手の人生も想像することで心を共鳴させなければ共存していくことができないのだと思います。

ここで私は世界平和のために一つ突飛な夢を語りたいと思います。それは、今、戦争状態にあるロシアとウクライナやパレスチナとイスラエルのトップを与論島に招き、与論献奉をさせるというものです。与論献奉の作法として、誰かが口上を述べている間は黙って聞かなければなりませんから絶対に口論にはなりません。そして、いつもニュースで表に出てくる政治的な各国の主張をその場で話しても面白くないので、これまでの人生で嬉しかったことや悲しかったこと、自身の健康のことなど、とにかくプライベートなことだけを話すという条件をつける。そうすると、例えばロシアのプーチン大統領が、

「最近私、腰と膝が痛くてですね。週一で整体に通っているのですよ」

みたいな話をした後に、ウクライナのゼレンスキー大統領が、

「それならプーチン大統領，私すごく腕のいい整体師を知っていますから，こんどクレムリンに派遣しますよ。でも，旅費は出してくださいね（笑）」

みたいな流れになれば，お互いミサイルを撃ち合っている場合じゃないねというふうに，和やかな雰囲気になると思うのです。これで和平実現につながれば，日本原水爆被害者協議会に次いで，与論献奉という与論の文化が日本で2番目のノーベル平和賞受賞の可能性が出てきます。トランプ大統領よりも遙かに上手に与論島が平和構築に関わることができるということです。

主催者の与論島の人たちは，双方が飲み過ぎてエキサイトしないように見守るのが役割です。そしてやっぱり，プーチン大統領とゼレンスキー大統領に「お二人がお酒でお体を壊さないように，こちらをつけてください」と言って，「アルコールウォッチ」と「酔っ払いリング」を売り込むのです。そうなれば本校の探究活動も世界から注目されて一石二鳥です。

まあ，ここまで勝手に夢のような話をしてきましたが，これもクリスマスだからこそできることかもしれません。このような突飛すぎて実現不可能と思えるような話も，形を変えつつ世の中を良い方向に導いていくかもしれないのです。「世界がこうなればいいな，ああなればいいな」と願うことは誰にでもできるはずです。

今日皆さんに配ってあるジョン・レノンの曲“Happy Xmas”の“If you want it”という歌詞はまさにこれを表していると思います。世界平和を願いながら，実際に曲を聴いてみましょう。

（“Happy Xmas”を流す）

いかがでしたか。月曜日の中高合同講演会で加藤先生もノーベル平和賞を取りたいとおっしゃっていましたね。皆さんも大きな夢を持ってください。与論島に生きてきた人間として，世界平和にどんな貢献ができるか，今日の夕食時の話題にしてみてもいいでしょうか。以上で二学期終業式の式辞を終わります。